

タイトル	政治と宗教からみるLGBT文化ータイ・フィリピン・日本の比較ー		
所属	南山大学人文学部人類文化学科	氏名	森下明璃



私は、この三国について、政治と宗教のつながりの違いを比較研究することによって、各国のLGBT文化にどのような差異をもたらしているのか考察している。

タイでは、国民の約95%が上座部仏教を信仰し、「開発僧」が行政や地域開発に介入している。「kathoey」と呼ばれる性的少数者の多くは、サービス業に従事し、タイ社会に溶け込んでいる。

フィリピンでは、性的少数者は「バクラ」や「ティボ」と呼ばれる。キリスト教会が持つ影響力が強大で彼らへの批判も大きい反面、町の中ではLGBTの人々が普通に働いている。

日本では、二国のように特定の宗教を信仰している人は少ない。政教分離の原則をとっていることもあり、宗教そのものがLGBT文化に与える影響は少ないと考えられる。かつて仏教が影響力を持っていた時代は「男色」としての同性愛がよく見られていたが、現在では二国のようにLGBTを公言できる環境ではない。

三国を比較してみると、政治について宗教的関与があるほど、LGBT文化が活発なことが判明した。ここから、タイとフィリピンでは、信仰する宗教の教義と自身の性的指向のギャップに葛藤するなかで、自身のアイデンティティを主張し、LGBT文化が盛んになったと考えられる。

【参考文献】

櫻井義秀2014「第27章 仏教僧・寺院の社会的役割」綾部真雄編『タイを知るための72章』明石出版

永井博子2016「第12章 性的マイノリティー—新しいアイデンティティー」大野拓司ほか編『フィリピンを知るための64章』明石出版

宮脇聡史 2021「第五章 「侵略者と戦うフィリピン・カトリック教会」—「性・生殖・家族」をめぐるナショナリズム」日下渉・青山薫・伊賀司編『東南アジアと「LGBT」の政治—性的少数者をめぐって何が争われているのか』東京：明石書店 136-158

